令和八年度　長岡大学　一般選抜（1期）

国語

一　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

二十世紀の技術革命は、衣食住や交通・通信ばかりでなく、その他の多くの領域でも、我々の日常生活に大きな影響を及ぼした。そもそも平均寿命が延び、日本社会が急速に高齢化し始めたのは、医学的技術の進歩した結果である。現に私が一九一九年の東京ではなく、一八一九年の江戸に生まれていたとしたら、おそらく世紀末まで生きて十九世紀の自画像などという文章を書いてはいなかったろう。

前世紀よりも、ではなく、人類の歴史の始めから十九世紀の終わりまでの全期間よりも、二十世紀はるかに多くの病の予防法と治療法を発見したのである(例えばいかなる感染症に対しても、二十世紀の化学療法剤(注)と抗生物質以前には、有効な薬剤がなかった)。

もし「技術」を、与えられた実用的目標(社会的・人間的目標)を達成するための手段の体系と考え、「科学」(自然科学)を特定の目標を離れて世界を理解するための知識の体系とみなせば、医学は本来、病の予防と治療を目的とするから技術的体系である。二十世紀後半に現れた分子生物学(注)と遺伝子の分子水準における解明は、本来科学的発見であり、その発見は、世界観に根本的な影響を与えると同時に、遺伝子操作という技術をも生みだした。

一般に科学と技術との関係は、しだいに密接となり、今世紀に入って殊にほとんど分かちがたく関連するようになった。「科学技術」という言葉は、単に「科学と技術」を意味するのではなく、「科学と結びついた技術」を含意する。科学と結びついた技術の発展は、科学から独立した伝統的技術の発展よりもはるかに早く、またその環境を操作する能力がはるかに強大であり、その程度(早さと能力)は、おそらく今世紀の初めに誰もが予想できなかったほどである。

かつては熱機関が熱力学を生んだのではなかった。しかし今では遺伝子操作が分子生物学を生んだのであって、熱力学が熱機関を生んだのではなく、分子生物学が遺伝子操作を可能にしたのではなく、分子生物学が遺伝子操作を可能にしたのである。その状あたかも核爆弾、更には原子力発電と核物理学との関係に似ている。

科学技術の早い発達と大きな能力は、人間の社会に対してほとんど常に、二つの可能性を与える。すなわち巨大な恩恵と巨大な破壊である。発達があまりに早いために、いわゆる「技術革新」、新しい科学技術は、第一に、自然環境の体系の全体にそれが及ぼす影響のわからぬうちに、出現する。また第二に、社会がそれをいかなる目的に使用するか適当な決定をくだす用意のないうちに、利用できるものとなる。その結果、新しい手段は、偶然にではなく原則として、人間に対し計り知れない利益とともに途方もない損害(の少なくとも可能性)を与える。

能力が大きいから、善悪両面がいずれも誇張されざるをえない。原子爆弾の製造は、第二次世界大戦中にヒトラー征伐を目的として計画された。ヒトラーの政権が崩壊した後にも、一度始められた計画は中止されず、爆弾が完成すると、それは広島と長崎に用いられた。その悲惨な結果の詳細が、全て予想されていたのではなかったろう。いわんや、その後に核兵器競争の恐怖が続くことを誰も考えてはいなかったにちがいない。

社会が核エネルギーの利用の仕方について十分な用意――戦略的、政治的、倫理的なそれ――を欠いていた時に、核爆弾はつくられた。もちろん核エネルギーは発電のためにも利用することができる。しかし、それには事故の危険も伴う。大きな事故の確率は小さいだろうが、もし起これば、損害は想像を絶する。その廃棄物が環境に及ぼす影響は、長期的には誰も知らない。

抗生物質は細菌感染に有効だが、他面では、耐性(注)の病原菌を増殖させる。その対策は確立されていない。遺伝子操作はある種の病の治療や食糧の増産に役立つだろうが、その他の何がそこから出てくるか。

遺伝子操作は人間のつくり替えに道を開く。現に遺伝病治療への展開は、人間の部分的つくり替えと考えることができる。つく

り替えることのできる部分は、どこまで拡大されるか。それが脳にまで及べば、人間は自らつくり出した技術によって、環境（人間以外の生物）を操作するばかりでなく、それ自身＝操作の主体そのものを、操作しうることになろう。二十世紀は羊の「クローン」まで行った。次の世紀はアインシュタインの「クローン」を目ざすのかもしれない。

しかし誰が、どういう目的で、どう人間をつくり替えようとするのか、誰にもわからない。その危険は前例のないものである。したがって対策も前例を破って画期的なものにならざるをえない。既に人間の遺伝子操作の研究を制限しようとする動きが出始めているのはそのためである。科学技術の進展は社会がそれを適当に統御しなければ、人間の尊厳と幸福への致命的打撃が予想されるところまできたのである。

人間の脳の主要な機能の中には、知覚、記憶、計算がある。知覚については人間の能力よりもはるかに鋭敏な「センサー」をつくることができる。記憶と計算については、「コンピュータ」が人間の記憶力とは比べものにならぬ大量の「データ」を蓄え、きわめて短い間に複雑な計算を行うことができる。これこそは二十世紀の技術革新の最も根本的なものであるかもしれない。

「コンピュータ」によって、人間が機械を使うのではなく、機械が人間に入れ替わる可能性が開かれた。現に「ベルト・コンベヤー」の流れ作業で始まった世紀は、ロボットが工場から労働者を追い出す状況をつくり出した。今では脳生理学者（の少なくとも一部）が脳を一種の「コンピュータ」とみなす仮説――それにもさまざまの種類があるが――を議論している。

科学技術は両刃（もろは）の剣である。そこからどういう怪物が現れるかを知らずにアラジンのランプをこすってきた。怪物は人類を救うかもしれないし、破滅させてしまうかもしれない。そのことをしだいに強く意識するようになったのも、今世紀のことである。技術の「進歩」が人間の幸福を約束するという神話の破壊は、十九世紀から二十世紀を分ける。しかし科学技術の加速的発展を統御する方法を、二十世紀は発見しなかった。それは今世紀が次の世紀へ先送りした課題である。

（加藤　周一『二〇世紀の自画像』による）

（注）化学療法剤　…　化学物質によって病気を改善する治療法で用いられる薬剤。
分子生物学　…　生命現象を分子のレベルで解明しようとする学問。
耐性の病原菌　…　抗生物質の使用により、抗生物質を分解したり無毒化したりする能力を獲得した細菌。

問一　傍線部ア、イ、ウ、エ、オ、カの言葉の意味として、本文に即して最も適切なものをそれぞれ一つずつ次から選び、番号で答えなさい。

ア　分かちがたく
1　容易に区別できるように
2　時間をかけて慎重に
3　感情的に対立して
4　切り離すことが難しいほど
5　一時的に結びついて

イ　含意する
1　はっきりと言葉にして説明する
2　偶然に意味が重なってしまう
3　裏に別の意味を含ませて示す
4　意味を限定して狭める
5　以前の意味を否定して置き換える

ウ　途方もない
1　予想外ではあるが小さな
2　筋道が立っていない
3　現実味がない
4　程度がはなはだしく大きい
5　一時的に生じる

エ　統御
1　適切に管理し制御する
2　完全に禁止する
3　自然の成り行きに任せる
4　統計的に分析する
5　過去の状態に戻す

オ　致命的
1　一時的ではあるが深刻な
2　決定的で取り返しがつかない
3　回復が可能な
4　精神的な影響に限られる
5　社会的評価に関する

カ　両刃の剣

1　時代遅れになりやすい技術　　2　一部の人に有効な特殊技術　　3　使い方で価値が変わる便利な道具

4　一度使うと元に戻せない危険な手段　　5　利益と害の両方を同時にもたらすもの

問二　波線部A「あたかも核爆弾、更には原子力発電と核物理学との関係に似ている。」について、筆者は、どのような点が似ていると考えているのか。本文の表現を用いながら、五十～七十字で説明しなさい（句読点を含む）。そのさい、「分子生物学」と「核物理学」の語句を必ず用いること。

問三　波線部B「操作の主体」について、これは本文では何を指しているか。本文の表現を用いて二十～三十字で説明しなさい（句読点を含む）。

問四　波線部Cでは「神話」という言葉が使われている。その理由として最も適切なものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　科学技術の進歩が、人類の歴史の中で古くから語り継がれてきた伝説だから。

2　科学技術の進歩が、人々にとって理解しがたく、現実離れした出来事だから。

3　科学技術の進歩が、事実に基づかない迷信として長く信じられてきたから。

4　科学技術の進歩が、十分な根拠があるにもかかわらず誤って否定されてきたから。

5　科学技術の進歩が人間の幸福を必ず実現するという根拠のない信念が、長く受け入れられてきたから。

問五　次の文章で本文の内容と一致するものはどれか。一致する文章の番号をすべて解答欄に記入しなさい（不正解が記入された場合は減点する）。

1　二十世紀の科学技術は医学の発展を通じて平均寿命を延ばし、高齢化社会の進行に大きく寄与した。

2　科学技術の発展は常に人類に利益のみをもたらし、深刻な損害を与えた例は存在しない。

3　原子力や遺伝子操作は、社会が十分な倫理的・政治的準備を整えた後に初めて利用されてきた。

4　科学技術の進歩を統御する方法は、二十世紀のうちにすでに確立された。

5　分子生物学の発見は世界観に影響を与えただけでなく、遺伝子操作という新たな技術を生み出した。

6　科学と技術は本来別のものであったが、二十世紀に入ってからは切り離せないほど密接に結びつくようになった。

二　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

学問の喜ばしさとは何かを問われて、それに正面から答えようとする時、私にとって唯一のあるべき解答は、自らが変わることだ、ということになるのである。どうすれば、喜ばしき形の学問がありうるのか。どうすれば、「A自己解体」がありうるのか。

その点について私はこんなふうに考えている。一つの比喩を使わせていただこう。見ず知らずの外国へ行く。使われている言語も違う。日常的習慣も違う。人間なら生理的に共通にプログラムされているといわれる顔の表情でさえ、自分とは違う。葬式で涙を流さなければならない民族、葬式で泣いてはならない民族、相手の目をまっすぐ見つめて話さなければならない民族、そうすることを失礼と考える民族、ボディ・ランゲージで発する信号のそれぞれが、民族を超えると異なり、国境を超えると変わる。

そうした異文化と接触した時、我々は驚く。その驚きは、もとより、未知のものに出会うことによって触発される驚きにはちがいないが、しかしそれはまた同時に自らの中にあるものを発見した驚きでもあるといえよう。

自分の中にあると思っていなかったもの、当然の前提として自分がその上に載っていながら、それがあまりにも当然の前提であ

るがゆえに、自分と向き合わせて検討してみることさえ、全くなしえなかったものに、それとは全く違った前提に立っている存在との接触を通じて、初めて気づかされる。その種の驚きもまた、同時にアそこには含まれている。

そうした状況は、一種の文化人類学的な驚きということができる。そして一般に学問、喜ばしき学問のありようは、このような文化人類学的な驚きの発見である。

もとよりそこには、一つの重要な要件がある。異文化に接触するときに、こちら側の文化の規範を異文化にあてはめ、こちら側の暗号のコードを使って相手を読んだとしても、意味ある驚きは得られない。得られるのは、相手に対する軽蔑か、無視かでしかない。

したがって、今日文化人類学者は、自らの文化コードを異文化に持ち込むことを、極端に警戒する。しかし、そもそもいかに理想的な文化人類学者といえども、自分の中にある全ての文化的規範のコードを脱ぎ捨ててしまうことなどできるわけではない。ただ、問題の核心はまさしくそこにある。相手の文化的コードを、相手の文化的文脈に即して理解しようとすればするほど、我々は、自分の中にある文化的規範を、一つずつ脱ぎ捨てなければならないことになる。簡単にいってしまえば、相手の文化的コードを姿見(注)とし、それに自らの文化的コードを映してみることによって、我々は自己を発見し、自己を解体し、新たな自己とその共同体を目ざすための材料を得るのでもある。

自らの文化的コードをすっかり脱ぎ捨ててしまうことはできない。自らのうちに一切の文化的コードをもたないような素っ裸の人間は、おそらくもはや人間とはいえまい。しかし異文化のコードを理解しようとするとき、逆にいやがおうでも自分の中にあるそれがイ明らかになることは確かであろう。

文化人類学というのは、共時的(注)に存在している諸文化を超えた視点でそうした作業が営まれる。しかし、これとよく似た構造をもっていながら、視野が共時的な存在の地平を見通すのではなく、継時的(注)なそれを見通そうとする分野もある。それは歴史である。

現代に生きる人間としての我々が、ある歴史的な過去に迫ろうとするとき、我々が現代の我々の前提とするさまざまな規範のコードの中に閉じ籠(注)もるかぎりは、決して過去を理解することはできない。

（　1　）、クローチェの言うとおり、一切の歴史は現代史であるのかもしれない。しかしそのことの意味は、決して、現代の立場から、全ての過去を截断(せつだん)することではあるまい。（　2　）過去に、過去としてぶつかるからこそ、現代の我々の無自覚な前提、明文化されないB立脚点が顕(あらわ)れる、という意味で考えたい。

それゆえ、歴史的驚きの発見は、文化人類学的驚きの発見が、共時的に存在する異文化との接触による自己の解体作業に連なるのと同じように、継時的に存在する異文化との接触による自己の解体作業に連なるのだ、ということができよう。

文化人類学型にせよ、歴史研究型にせよ、いずれの場合にも、時間軸の違いこそあれ、結局は、知的C営為が、自己の確認と自己の解体ということを目ざしているのであるとすれば、多かれ少なかれ全ての学問は、これと同じ構造をもっているといえるのではなかろうか。

（　3　）、学問、喜ばしき学問とは、常に、どういう方向にか、自己、日常的な自己の解体に対面させるような種類のものだ、といってよいだろう。

（村上　陽一郎『歴史としての科学』による）

（注）文化人類学　…　人類の多様な文化・社会を研究する学問。
姿見　…　全身を映す大きな鏡。
共時的　…　ある現象を、時間の流れの一断面における静止現象としてとらえ、その構造を体系的に記述しようとするさま。
継時的　…　時間の経過とともに変化などが進むさま。
クローチェ　…　Benedetto Croce イタリアの哲学者。（一八六六～一九五二）

問一　傍線部A～Cの言葉の意味として、本文に即して最も適切なものをそれぞれ一つずつ次から選び、番号で答えなさい。

A　自己解体
1　自分の人格や性格を完全に否定すること　2　自己の文化的前提や規範を問い直すこと
3　自己を社会から切り離して孤立すること　4　自分の考えを一切持たない状態になること
5　自己を他者と同一化すること

B　立脚点
1　行動を起こすための物理的な位置　2　学問を行う際の専門分野
3　思考や判断のよりどころとなる前提　4　社会的に認められた立場や地位
5　学説を支える実証的な資料

C　営為
1　偶然に生じた出来事　2　日常生活の中での習慣的行動
3　本能に基づいて自然に行う行動　4　意識的・継続的に行われる人間の活動
5　結果として残された成果物

問二　空欄（1）～（3）に入る最も適切な語を次から選び、記号で答えなさい。

A　さて　B　なるほど　C　ところで　D　他方で　E　つまり　F　むしろ

問三　二重傍線部ア・イの指示代名詞について、以下の各問に答えなさい。

①　傍線部ア「そこ」とはどこのことか。本文の言葉を用いて、十五～二十字で説明しなさい（句読点を含む）。

②　傍線部イ「それ」が何を指しているかについて、左の文章が説明している。（　　）の空欄に入るべき本文中の最も適切な言葉を答えなさい。

「それ」は自らが無自覚に抱いている（　　）を指している。

問四　波線部「文化人類学型にせよ、歴史研究型にせよ」について、筆者は文化人類学と歴史研究とで学問の構造がどのような点で共通していると考えているか。本文の表現を用いながら、四十～六十字で述べなさい。（句読点を含む）。

問五　筆者の考えと一致するものに○、一致しないものに×を書きなさい。

1　異文化を理解するためには、自らの文化コードを積極的に相手に当てはめるべきである。
2　歴史研究とは、現代の価値観によって過去を一方的に評価する作業である。
3　学問の喜ばしさとは、異文化との接触を通じて自己を発見し、自己解体へ向かうことである。
4　相手の文化的コードを理解しようとするほど、自らの文化的規範を脱ぎ捨てる必要が生じる。
5　学問とは、自己の文化的コードを保持したまま他文化を評価する営みである。
6　歴史研究も文化人類学と同様、異文化との接触による自己解体の営みである。
7　学問の目的は、自己を変えることなく既存の文化的規範を強化することにある。
8　異文化を姿見として用いることで、自己の前提を明らかにする営みが学問である。

三　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

観光（外貨カクトク）による地域経済の活性化を進めるには、地域内に落ちるお金の量を増やさなければなりません。地域全体の売上を増加させるなら、お金を使って頂けるお客様の数を増やすか、お客様の消費単価（客単価）を上げるしかありません。

お客様の数を増やすにしても、客単価が低ければ、労多くして実入りが少ない（　A　）商売になってしまいます。ローエンド層を無視するということではなく、ハイエンドの富裕層・知識層のお客様を積極的に取り込むことで新しい活路を見出し、地域全体へ経済的なハキュウ効果を高めることを考えて欲しいのです。トップエンドを出来るだけ引き上げることで市場全体へのシャワー効果を高め、最終的には頂上からスソノまで大きく広がるピラミッド型のマーケット形成を目指すことが、市場拡大のサイゼン策だからです。

これまでの日本は、観光シンコウというと入込数（単純な来訪者数）を伸ばすことばかりに力をソソいできました。しかし、観光バスでどっと乗り付けてはすぐ立ち去ってしまう団体客やイベント等の開催効果で一時的な来訪者がいくら増えたところで、本当の意味で地域が潤うことには繋がりません。近年、観光庁はアジア諸国からの訪日旅行ソクシンに力を入れてきましたが、これについても同じことが言えます。中国や韓国、台湾、香港、タイ、マレーシア、インドネシア等からのお客様を増やすことは重要ですが、数を求めるあまりに団体ツアー客ばかりを引き受けていても長期的に経済を支えていくのは困難です。観光立国を目指すのであれば、もっと本気で個人客や富裕層のニーズに応えていく必要があります。最近になってやっと観光庁やＪＮＴＯ（日本政府観光局）も欧米市場や富裕層へのプロモーションに本格的に取り組もうという流れになっていますが、まだまだ大きな柱にまではなっていません。

地方に出向いた時に富裕層市場の話をすると、決まって「本当にそんなお客様がいるのか？」という反応があります。日本では実感しにくいかも知れませんが、世界には純粋にレジャーだけで年間一〇〇万ドル（約一億円）を使える人が約一〇万人いると言われています。第1章でも紹介しましたが、スイスではこのような超富裕・ラグジュアリー層を取り込むための工夫をソフト・ハードの両面にわたって続けてきました。そして、ハイエンド層からのシャワー効果により多様な市場形成を長年積み重ねてきたのです。この点は、ピラミッド型の市場をコウチク出来ていない日本の観光地との大きな違いです。

実際、観光・リゾート地としてのツェルマットを支えているのは富裕層を中心としたリピート客です。私が代表をツトめている「ＪＴＩＣ．ＳＷＩＳＳ」では、日本からのお客様向けに現地ツアーやガイドの手配を行っていますが、大部分が昔からの顧客とその紹介です。中には毎年決まった時期に訪れて「この一週間は山田君とスキーがしたいので必ずスイスにいてね」と個別リクエストをくださる贔屓（ひいき）客もいます。もちろん日本人だけでなく、スキー教師・トレッキングガイドとして、ヨーロッパの富裕層のお客様とも数多くお付き合いしてきました。彼らのキュウカスタイルに接し、その価値観やお金の使い方をリアルに感じられていることは、現在、地域の観光シンコウのお手伝いをする上でも大きな財産になっています。

頂上が高く、市場のスソノが広がるほどに、地域全体における収益性と利潤は拡大します。また富裕層や知識層を相手にすることでサービスの質も上がります。観光のみならず、地域シンコウにおけるあらゆる事業化を進める上で、このように上位マーケットの恩恵が末広がりにハキュウしていく「シャワー効果」はきわめて重要なのです。

（山田桂一郎「観光地再生の処方箋」、藻谷浩介・山田桂一郎『観光立国の正体』Ⅰ第4章　新潮新書刊　による）

問一　傍線部1～10のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は楷書で丁寧に正確に書くこと。

問二（　A　）に入る言葉として最も適切なものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　効率のいい　　2　効率の悪い　　3　効果的な　　4　逆効果な　　5　現実的な　　6　非現実的な

問三　二重傍線部「本当の意味で地域が潤うことには繋がりません」とあるが、「本当の意味で地域が潤う」とはどういうことか。本文の内容に即して最も適切なものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　海外から多くの人々が地域を訪問することにより、地域全体がにぎわって雰囲気も明るいものになり、地域の人々も明るく前向きな気持ちになるから、結果として地域全体が活性化されて住民も増えるということ。

2　海外から数多くのお客様を受け入れることによって、地域の人々との交流が生まれ、地域内の生きた情報が世界に伝播する。その結果、さらに多くの人々が海外から地域を訪れるようになり、さらなる交流が生まれ、地域全体が活性化するということ。

3　海外の富裕層や知識層のお客様のニーズにも応えられるよう、地域内のソフト・ハード両面を整備し、ハイエンドからローエンドまで対応できる多様な市場を域内に形成すれば、市場のトップからボトムまで経済効果が広がることが期待でき、地域全体の収益性や利潤が拡大するということ。

4　年間を通じて大規模なイベントを数多く開催し、団体客のみならず個人客もたくさん受け入れることによって、イベントそのものの収益のみならず、関連グッズの販売などでも収益を上げることができるため、地域全体に経済効果をもたらすということ。

5　スイスの例のように、毎年決まって地域を訪れ、一億円くらい使うようなハイエンドのお客様だけを、人数を絞って受け入れ、彼らに集中して対応すれば、地域全体の市場規模が大きくなり、地域が活性化するということ。

問四　本文中の波線部　ア「シャワー効果」と、イ「シャワー効果」の説明として最も適切なものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　ア、イともに、ハイエンド層の取り込みが地域全体に経済効果を及ぼすという意味であるが、筆者はこの言葉を最も重視しており、読者に印象付けるために、最後のイのところを「　」で括って強調している。

2　アは、ハイエンド層の取り込みによって市場のトップからボトムにかけて、シャワーのように経済効果が広がるという意味であり、イは、それに加えて、サービスの質の向上が見込めるなど他の分野にも効果が広がるという意味を含む。したがって、後者の方がより広い範囲に効果が及ぶことを示すため、イを「　」で括ってアと区別している。

3　アは日本国内の地域において、トップからボトムにかけてシャワーのように経済効果が広がるということを意味しており、イはスイスのツェルマットにおいて、トップからボトムにかけてシャワーのように経済効果が広がることを意味している。したがって、対象地域が異なることを示すため、イを「　」で括ってアと区別している。

4　アは、日本の地方にアジア諸国からの訪日旅行客を取り込んだ場合の経済効果を表しており、イは欧米諸国からの訪日旅行客を取り込んだ場合の経済効果を表している。欧米諸国からの訪日旅行客の方がより多くの経済効果が見込めることを示すため、イを「　」で括ってアと区別している。

5　シャワー効果という言葉は、海外からの訪日旅行客が爆買いなどで「湯水のごとくお金を使う」ことを表している。しかし、現代人には湯水という言葉よりシャワーという言葉の方が浸透しているため、筆者はシャワー効果という表現を用いたと考えられる。イを「　」で括ったのは、筆者がこの言葉を最後にもう一度強調したかったからである。